

井上靖文学における「学問」

——「敦煌」試論——

高木伸幸

はじめに

井上靖の「敦煌」は、『群像』昭和三十四年一月号から五月号にかけて連載された長篇小説である。二十世紀初頭に中国西域の敦煌石窟（千仏洞）から膨大な経巻類が発見された歴史的事実に材を取っている。同年十一月、講談社より単行本『敦煌』が出るや、たちまち「叙事詩的」な歴史小説として注目を集め、翌三十五年一月、短篇「楼蘭」（昭和三十三年七月『文芸春秋』）と合わせて毎日芸術大賞を受賞した。以来、今日まで井上靖の代表作の一つに数えられている。

しかし、この「敦煌」は、必ずしも肯定的な評価ばかりを与えられてきたのではない。特に主人公趙行徳の人物像については、連載完結の直後から、否定的な意見が

下されている。

例えば平野謙は、「敦煌」を「今月の小説」（昭和三十四年四月二十三日『毎日新聞』）に取り上げ、「趙行徳という学問好きの主人公の性格が、しまいまで」「ハッキリ」せず、小説の「背景」となる「敦煌石窟という今世紀のナゾ」と較べて「主人公の人物が軽量すぎる」と論じた。「西夏の文字をきわめ、仏教の哲理にまでわけいりながら、他方歴戦の勇士となつてゆく。そういう文武両道の達人めいた主人公の設定が、作品進行上の方便のようにしか受けとれなかった」とも書いている。

また椎名麟三も「創作合評」（昭和三十四年六月『群像』）で「敦煌」を取り上げ、「趙行徳というのはわりあい曖昧」で「戦乱の中の一人物として小説の中で動かしていくのには都合のいい人物」だと指摘し、それ故に「非常に客

観的な歴史的な興味と、そんな歴史的な状況のなかに生きていく人物がからみあわずに離れているという感じがした」と語っている。

これらの考察は、「敦煌」という小説を作家から切り離し、作品それ自体で捉えた場合、一応的を射たものと言える。趙行徳の行動には、物語展開に合わせた、いささかご都合主義的な部分が認められることは決して否定できない。

しかし趙行徳の人物像について、「学問好き」という側面に注目して、より深く捉え直してみると、そこには作家の内面が多分に反映されていることが見えてくる。福田宏年も指摘しているように、井上靖は「学問に対して常に並々ならぬ尊敬の念を寄せてい」²⁾た作家であり、その井上靖の学問や書物に対する思いが、趙行徳を通して、さまざまな形で表されているのである。

以下、「敦煌」について、趙行徳と「学問」との関わりに焦点を当てながら考察を進めたい。

—

物語の冒頭、趙行徳は「進士の試験を受けるために、郷里湖南の田舎から都開封へ上つて来」る。その主人公について次のような説明が為されている。

趙行徳は受験者の中に、自分より優れた学力を身につけたものが何人もあろうとは思わなかつた。実際にまた彼はそう自負していいものを身につけていた。儒者の家に生まれ、幼時から学問に親しみ、三十二歳のこの年まで、書物を身邊から離れた日はないと行ってよかつた。

趙行徳は、いわば学者の家に生まれ育ち、三十二歳までの前半生を学問一筋に生きてきた人物として設定されているのである。ただし、この冒頭には「学問を身につけて官吏になることが、身を立てる者の等しく選ぶ道であり、官吏任用試験に合格することが、出世への緒口であった」とも記されている。学問一筋に生きてきた趙行徳は当初、その「学問」を立身出世の手段と捉えていたことに注意したい。

ところが趙行徳は居眠りによって「大事な試験を自ら放棄し」、進士試験に落第する。その直後、あてもなく城外の市場を歩き、全裸のまま西夏人女性が売りに出されているのを見かける。この場面は、井上靖自身も明かしているように、桑原隲藏の論文から想を得たものである³。「敦煌」の物語が、ただなる想像の産物でなく、細部に史料を活かしながら創られていることが確かめられる。しかし、この場面を読み解く上では、そのこと以上に、趙行徳が西夏人女性の態度に驚かされたこと、そしてその女性を救った結果、礼として貰った布片によって西夏文字の存在を知らされたことが重要であろう。一連のいきさつを通して、趙行徳は次のように決意を固めるに至った。

趙行徳はつい先刻まで進士試験にこだわっていた自分がひどくつまらないものと思えた。(中略) た今彼が眼にした事件は、学問とも書物ともまるで違つた無関係なものであった。少なくともいま彼が持っている知識では理解し難いものであった。(中略) /あの西夏の若い女が板の上に身を横たえて考

えていたことは何なのか。あの女は殺されるのが何でもないであろうか。(中略) /趙行徳が西夏への旅立ちを決心したのは、市場で西夏の女に会つてから十五日程経つた時のことだった。(中略) 西夏は自分の読み得ない文字と、自分の理解し得ない一人の女の血を持つている北方の謎を秘めた一族であるに他ならなかった。そこには自分などが夢想もしなかつた力強い、しかも価値ある何ものかが、どろどろした油のような在り方で在るのではないか。この物語冒頭部での趙行徳を考察するにあたって、「敦煌」より約六年前に井上靖が執筆した短篇歴史小説「異域の人」(昭和二十八年七月『群像』)の冒頭を参照したい。そこにおいては、主人公班超について、次のごとく記しているのである。

班超は字は仲升、『史記後伝』の作者班彪の子として、建武八年(西紀三二年)に平陵に生まれる。兄固は後漢の儒家として『漢書』の撰者として有名である。班超は幼時から大志を抱き、常に進んで艱苦を取り、書伝を涉獵して倦まなかつた。(中略)

ある時筆を投じて、嘆じて曰く「大丈夫他に志略なし、猶当に傅介子、張騫の功を異域に立て、以て封侯を取りしを効ふべし。安んぞ能く久しく筆硯の間を事とせんや」——『後漢書』班超伝は斯う伝えている。(中略)／班超が匈奴討伐軍に参加して西域に使したのは永平十六年(西紀七三年)、四十二歳の時である。

『後漢書』に拠った記述ではあるが、右に見る班超と、「敦煌」冒頭における趙行徳は、重なる部分が多いことに気付かされよう。班超も、趙行徳も、ともに「儒家」「儒者」という学を重んじる家系に育ち、どちらも「幼時」から書物を「涉獵し」、「学問に親しみ」ながら成長した。しかし、そうしたいわば書齋派としての半生と決別するごとく、班超は「四十二歳の時」に「西域に使し」、趙行徳は「三十二歳」にして西夏へと旅立ったのである。

西夏は中国西北部、現在の甘肅省及び寧夏回族自治区にあたり、厳密に言えば、いわゆる西域に位置する国家ではない。しかし「中国本土と西域とを繋ぐ」いわゆる河西回廊を支配下に収め、多くを漠地に覆われた辺境の

国家として、広義ではその土地を西域と見做すことができよう。また西夏へ向けて旅立った趙行徳は、最終的には「西域への門戸をなす」「沙州(敦煌)へ」と辿り着く。趙行徳の旅立ちは、西域へ向けた旅立ちであったと捉えても差し支えあるまい。

この趙行徳の行動は、右に見るごとく、「異域の人」にも記した班超の人生に倣って描かれており、そこには井上靖の学問観の一端が表れているよう。井上靖は、書齋内だけの学問、書齋に踏みとどまるごとく人生に限界を感じ、学識豊かな人物も、ある年齢に達してから、より大きな人生を求めて外の世界へ出ていくべきだと考えているのである。

ただし趙行徳の場合、「学問」への興味は失っておらず、旅立ちにあたって「自分の読み得ない文字」、すなわち「西夏文字」を学ぶことも目的であった。趙行徳は「学問」への興味を維持しながら、書物だけでは学べない「価値ある何ものか」を求めて西夏、西域へ旅立ったことに留意されたい。

つまり「敦煌」冒頭部において、井上靖は、「学問」

それ自体の否定でなく、あくまで書斎の中だけの「学問」に限界があることを主張している。さらには「進士試験にこだわ」るような、「学問」を自らの出世の手段に用いることについても、異議を唱えているのである。そして前半生を書物に親しんだ学識豊かな人物が、より大きな人生を求めて旅するに相応しい場所として、西域を位置づけているのである。

二

西夏へ向けて旅立った趙行徳は途中、涼州附近で西夏軍と回鶻軍の戦闘に巻き込まれ、西夏軍の漢人部隊に無理矢理組み込まれる。勇猛な武将朱王礼の部下となった趙行徳は、辺土の沙漠で数々の戦闘に参加するなどして、やがて西夏軍に叛旗を翻した朱王礼率いる漢人部隊の一員として沙州（敦煌）に辿り着く。

敦煌で練り広げられる西夏軍と漢人部隊の決戦に際して、趙行徳が経巻類を戦火から守るために石窟へ塗り込めたのは、景祐二年（西紀一〇三五年）十二月十三日に設定⁵されている。対して趙行徳が西夏へ向けて開封を

出発したのは天聖四年（西紀一〇二六年）初夏に設定⁶。趙行徳は、およそ十年に及ぶ河西回廊の放浪を経て、西域の入口敦煌へと至ったのであった。

西域（河西回廊を含めた広義の西域）の中で、趙行徳の姿がどのように描かれているのか、具体的に確かめてみたい。

例えば趙行徳は西夏軍漢人部隊の中において、「旋風礮」の「潑喜陡（射手）」として、馬に乗って「敵陣を縦断」する役を担当していた。戦場ではその役を務めながら、「いつも気を失」ってしまい、しかし「馬と共に部隊へ戻って来ていた」。「趙行徳はこうした経験から、戦闘というものがたいして難しいものではないように思われた。石を何個か射ち出せば、あとは気を失おうとどうしようとする自分の持つ運命に任せていればいいと言った気持ちだった」。また西夏軍が「回鶻人の拠点」である「甘州城」を攻略した際、趙行徳は朱王礼によって「決死の兵五十騎」の一人として選ばれ、「城内へ真先にはいり、先頭に立って城内を探索し、危険を冒して狼煙を上げる大役を果たした」。こうした趙行徳の兵士としての働き

ぶりを見て、朱王礼は「お前は俺以上に死というものを何とも思っていない人間だ。この俺でさえ何回となく舌を捲いている」と評している。趙行徳自身も「俺は今まで随分沢山の戦闘に加わったが、一度も卑怯なまねはしなかった」と語っている。趙行徳は西夏軍漢人部隊の兵士として、決して力強くないものの、如何にも命知らずの勇敢な戦いぶりを見せているのである。開封の市場で見かけた「殺されるのが何でもない」かのような西夏人女性の姿に影響され、西夏へ向けて旅立った趙行徳は、西域の沙漠において、その西夏人女性の生きざまを自らに課し、死を恐れぬ勇敢な生を實踐してみせたと見えよう。

しかし趙行徳は西夏軍漢人部隊の中で、ただ戦闘に参加する一兵卒としてあつたのではない。趙行徳は「読み書きができるということ」で朱王礼から「興味」を持たれ、「幾分の敬意を払」われていた。行軍中、疲労すれば水を与えられ、部隊から遅れた際にも守りの兵をつけてくれるなど、趙行徳は朱王礼から特別に遇されていた。やがて趙行徳は「朱王礼の参謀と云つた役柄に就」く。

こうした朱王礼と趙行徳の関係の中、趙行徳が「参謀」として用いられる設定は、荒木敏一および宮崎市定の研究を参照したと井上靖自身が記している⁷⁾。ただし荒木、宮崎の研究では、西夏王の李元昊が科挙の落第秀才を誘い、科挙落第者も自ら西夏軍へ「投入」し、「謀師」となつたと解説している。一方、「敦煌」の主人公も確かに科挙の落第者である。だが趙行徳の場合、無理矢理西夏軍に組み入れられ、漢人の上司朱王礼から評価された結果、参謀となつた。要するに井上靖は趙行徳を祖国宋に自ら叛いた人物として描きたくなかつたのであり、まして李元昊の誘いに応じたのであれば、敦煌にて李元昊の西夏軍と朱王礼の漢人部隊の決戦を描くことにも差し障りが生じてしまう。不本意にも入れられた軍隊の中で、勇敢に行動しながら、さらに自らの学識を活かしていく、その主人公の知的かつ勇ましい姿を井上靖は描きたかつたのである。

そうした井上靖の表現意図をよりの確に把握するためにも、井上靖が作家になる以前から持ち合わせていた氣質と言うべき、ある一面について言及したい。

井上靖は小説家であり、また旧制第四高等学校在学中

から詩作を続けてきた詩人でもあった。知性と豊かな学識の持主であることは言うまでもない。しかし書齋に踏みとどまるような、芥川龍之介型の青白き知識人では決してなかった。よく知られているように、井上靖は本格的に詩作に取り組み始める以前、第四高等学校柔道部員として、柔道に全てを捧げるがごとき毎日を過ごしていた。井上靖次男の卓也氏によれば、父親は「長い柔道生活で作り上げられた激しい気性の持主」であり、如何にも「男くさい男」であつたらしい。それだけに逝去前、入院中の井上靖に関する思い出として、「癌という、この世で最も激しい戦場で、父は勇敢な戦士であつた」とも書いている⁽⁸⁾。

井上靖はただなる知性と学識の持主でなく、勇ましく生きることも好んだ作家だつたのである。もちろん、勇敢に生きることのみを良しとしていた作家でもない。文学者である以上、知性と学識は、人間が持つべきものとして、勇敢さよりも、むしろ優位に置いていたであらう。「敦煌」においては、朱王礼に趙行徳を優遇させている

ことから、それは確かめられる。

つまり井上靖は知性と学識を評価した上で、さらに勇敢な行動力を併せ持った人物に対して、学問に生きる人間のあるべき姿を見出していた。しかも西域という土地は、人間にとつて過酷な自然が広がり、戦乱が繰り広げられる地帯であるだけに、学識ある人物が勇ましさを身につける上で、格好な舞台だと捉えていたのである。「学問好き」でありながら、西域の中で「勇士となつてゆく」趙行徳の人物設定について、平野謙は「作品進行上の方便のよう」だと批判していた。だが、実はそこには井上靖独自の学問観、西域観が託されていたのである。

朱王礼から目をかけられた趙行徳は、念願であつた西夏文字を学ぶ機会を与えられる。その場面を見ても、「学問」に生きる趙行徳にとつて、西域での兵士生活は決して無駄でなく、むしろ有意義な経験として解釈できると言えよう。すなわち、西夏の都興慶に至つた趙行徳は、「初めはいろいろな雑用を仰せつかりながら西夏語の訓練を受けたが、やがてその学識を認められて、特別の仕事が与えられるようになった」。「頒布用の小冊子を作つたり、

漢字の意義を書き写したりする仕事を手伝わされた」上に、「西夏文字と漢字との対照表を作る仕事に携わ」ることで、彼は「月日の経つて行くのを忘れた」。「趙行徳はここで久しぶり、文字を相手にする自分本来の生活を取り戻すことができた」とも記されている。

趙行徳はこの興慶での生活において、以前にも増して、「学問」に喜びを見出しているように見える。西夏軍漢人部隊の一員として、「学問」とはかけ離れた毎日を過ごしたことで、趙行徳は「文字を相手にする自分本来の生活」の中にこそ、実は大きな喜びがあることに気付かされたのかもしれない。ここに來て趙行徳は、進士試験の合格目的とは異なる、「学問」それ自体の喜びを知り得たとも言えるだろう。兵士として〈勇敢な生〉を体験したことが、趙行徳の「学問」への理解を確実に一歩深めさせたのである。

三

物語中盤に入つて、興慶から再び朱王札の部隊に戻つた趙行徳は、「仏教というものに改めて心を惹かれ始め

る。

これより先に趙行徳は、甘州城で救つた回鶻の王族の娘と愛を誓い合つていた。しかし西夏文字を学ぶために趙行徳が興慶へ派遣されていた間に、娘は当時西夏王子だった李元昊の側室にされてしまふ。部隊に戻つた趙行徳に対して、娘は自らの潔白を示したく、身を投げて死ぬ。この「回鶻の王族の女の死」が、主な切掛けとなつて、趙行徳は仏教に近づき始めたと言明されているのである。

この趙行徳の心境の変化は、それまで仏教との関わりが全く描かれていないだけに、やや唐突に感じられる。趙行徳が経巻類を石窟に塗り込める一篇のクライマックスを描く上で、彼には仏教への信仰を持たせておく必要があつて、その物語の都合に合わせた牽引的な設定と言えなくもない。平野謙や椎名麟三からマイナス評価を下された理由も一つはここにある。

しかし、辺土で兵士として過ごす趙行徳について、「死は常に彼の周囲を取り巻いて」おり、「実際に行徳は、毎日のように死んで行く人間を眼にしていた」とも記さ

れている。その結果、「行徳の眼には、日増しに人間と
いうものが小さく、その営みが無意味なものに映るよう
になった」。だからこそ趙行徳は、仏教に関心を示し始
めたのもあつた。こうした説明と併せて、趙行徳が西
域にあつても「学問」に対する興味を失わぬ人物である
ことを考慮すれば、「敦煌」に描かれた（仏教）は、宗
教の一つである以上に、「学問」の一形態として読み替
えることが可能かと思われる。西域の沙漠の中、漢人部
隊の一員として、前半生とは異なる経験を数多く積み重
ねた趙行徳は、より広い視野から「学問」に向かい合え
るようになり、「仏教」に対しても、一つの「学問」と
して興味を深めていったと解釈できるのである。だとす
れば、次の場面などは、趙行徳の「学問」への関心の高
さと熱意を表し、大いに説得力ある描写として見えてこ
よう。

（前略）行徳は城内の寺から、法華経の一卷を借り
出し、それを読み終わると、次から次へと結局七巻
全部を読み終えた。こうしたものを受け入れる心の
地盤が、いつか行徳の心の中に生まれていたのだあ

る。法華経を読み上げると、こんどは「金剛般若経」
を読み始めたが、それがいかなる教えを説くもので
あるかを更に詳しく知るために、大智度論という金
剛経の注釈書があることを教えられ、それを数巻ず
つ借り出して読んだ。儒教の哲学とは全く異なつた
仏教の教理に、行徳は次第に烈しく惹かれて行つた。
行徳はまるで熱病にでもかかったように、大智度論
百巻を次々に借り出して来ては、辺土の兵舎の片隅
で読み耽つた。

右の引用部における趙行徳の姿は、「経典」を、いわ
ゆる書物、特に學術書に置き換えた場合、学者肌の人物
に如何にもありそうな行動と捉えることができる。

ここで井上靖の西域との関わりに目を向けると、しば
しばエッセイで記しているように、井上靖は昭和七年に
入学した京都帝国大学文学部に在学中に西域に興味を持ち
始め、以来西域関係の書物、研究書を手当たり次第、濫
読するようになった。その西域文献に関する読書は戦
中を挟んで「獵銃」（昭和二十四年十月『文学界』）「闘牛」
（昭和二十四年十二月『文学界』）による文壇登場まで継

続され、作家デビュー以降は、「敦煌」を含めた、いわゆる西域小説に結実したわけである。

右の経典を次々と借り出し、読み耽っていく趙行徳の姿には、特に学生時代に西域関係の文献を次々と読み漁った井上靖自身の姿が反映されているよう。また特に「敦煌」の創作にあたって、井上靖は京都大学人文科学研究所の藤枝晃による全面的な協力を得ていた^⑩ことも重視したい。史料収集や時代考証など、藤枝晃からさまざまに助言を得ていく中で、井上靖は学者、学問に対する敬意を膨らませ、その気持ちで趙行徳像の形成、そして「敦煌」のモチーフに多大な影響を与えたと推察される。「敦煌」は、井上靖の学問と書物に対する深い関心、尊敬の念に支えられ、執筆された小説なのである。沙州（敦煌）の町が戦火に襲われることが確実になった際、趙行徳がある寺の内部で出会った次の光景を見ても、そのことは裏付けられよう。

室内を覗き込んだ行徳の眼に最初映ったものは、そこを一面に埋めている夥しい経巻や反古類と、その中に居る一見して二十歳前後と思われる三人の

青年僧たちの姿であった。（中略）／行徳は初め彼らは何をしているか判らなかつたが、そのうち三人の僧が経巻を選び分ける仕事をしていることを知つた。一つの経巻を手に取つて、それに長く眼を当てていることもあれば、直ぐそれから眼を離して、他の経巻を取り上げる場合もあった。行徳は何となく見惚れるような気持ちで、三人の作業を見守つていたが、暫くしてから、／「一体、何をしているのか」／と声をかけた。（中略）／「経巻を選び分けている」／同じ僧侶が答えた。／「選り分けてどうするのだ」／「万一の時の用意をしているのだ。若し寺に火のかかるような時は選り分けたものだけ持つて逃げる」（中略）／「どうして経巻を置いて避難できぬのか」／行徳が訊くと、青年僧の顔には明らかにそれと判る軽蔑の色が現われた。今まで黙つていた一番若い僧が言つた。／「自分たちの読んだ経巻の数は知れたものだ。読まないものがいっぱいある。まだ開けてさえ見ない経巻は無数にある。——俺たちは読みたいのだ」／その言葉が急に行徳の鉢全体

に熱く滲み入って来た。そのために暫くの間行徳は自分の鉢全体が痺れているような気がした。曾て何年前か前、自分はこれと同じ言葉を何回口から吐いたことだろうと思った。

「どうして経巻を置いて避難できぬのか」という趙行徳の言葉に対して、青年僧が見せた「軽蔑の色」。「経巻」を書物に置き換えれば、この青年僧の表情は、書物に親しむ人々、ことに学者肌の人間たちから大いに共感を集めるものと言えよう。彼等にとつて、書物を焼かれたら困るのは当然であり、そのことがわからない人間は軽蔑する他はない。この場面では、趙行徳でなく、彼に対応した青年僧にその表情を浮かべさせているが、この青年僧と趙行徳が同じ価値観の持主であることは、「俺たちは読みたいのだ」という「一番若い僧」の言葉が「行徳の鉢全体に熱く滲み入って」いることから明らかである。青年僧たちと趙行徳の経巻に対する熱い思いを描きながら、そこには書物に至上の価値を置く読書家、学者肌の人間たちの気持ちが表示されている。学生時代以降、西域関係の書物を次々と涉獵してきた井上靖の思いが、

やはりここに隠されているのであろう。さらに言えば、「敦煌」創作の協力者藤枝晃から作者が受けた感銘も、これまた同様に、その奥に秘められているのではないか。井上靖は「敦煌」執筆中、京大人文科学研究所を訪ねた際、「自分の部屋の方が書物と資料の山積で居られなくなり、いまは歴史研究室の方へ割込んで居を移している」という、藤枝晃の如何にも学者らしい姿に接し、「最近で一番気持のいい時間」に思えたこと記している¹¹⁰。井上靖自身が読み耽った西域文献や、藤枝晃の研究室に山積にされた「書物と資料」のイメージが、右の「夥しい経巻や反古類」には投影されているのである。

「仏教」という一つの「学問」に深い興味を抱き、経巻を何よりも大切に考える趙行徳は、まもなく戦火に見舞われる敦煌の町の中で、さらに次のような感慨に耽る。

併し、と行徳は思った。ただ經典だけは彼らを見舞おうとしている運命から救うことができるかも知れぬ。他の何ものをも救うことはできないが、經典だけは救えるかも知れない。／財宝も生命も権力も、それを所有している者の持物であったが、經典は

違っていた。經典は誰のものでもなかった。ただ焼けないで、それがそこにあるだけでよかつた。(中略) 焼けないでそこにあるというだけで、それは価値を持つていた。(中略)／經典を火から守れるものなら守つてやろうと思つた。(中略)千仏洞の匿し穴が、急に生き生きとした意味を持つて、行徳に思い出されて来た。

「經典は誰のものでもなく、そこにあるだけで」「価値を持つ」つと趙行徳は考えている。趙行徳は自らのためではなく、一つの「学問」である「仏教」を尊敬し、その価値を重んずる故に経巻類を千仏洞(敦煌石窟)に塗りこめた。「經典」という書物をより多くの人々に残すべく戦火から守つたのである。その行為は、広く世の中(全体)のために尽さんとする視野の広さがあり、また自らの命を顧みない勇敢さも感じさせる。前半生においては、進士試験合格という、あくまで(個)のためにのみ、書齋の中だけで「学問」に打ち込んできた趙行徳。その彼が十年に及ぶ西域放浪を経て、勇氣ある姿勢を獲得し、かつ「学問」に対してもより広い視野を持つに至つたの

である。このクライマックスにおける趙行徳の姿には、人が学問とどのように関わるべきか、井上靖の考える一つの理想像が映し出されているのである。

おわりに

二十世紀初頭に中国西域の敦煌石窟から膨大な経巻類が発見された歴史的事実に対して、井上靖は「強い感動」を受けた¹⁵⁾。それが小説「敦煌」創作の出発点と見て間違いない。かつて經典を戦火から守つた人間が存在し、およそ九百年の時空を経て発見されたそのことは確かに感動的である。中でも井上靖はその歴史的事実から、学問と書物に対する尊敬の念を感じ取つた。そして自らの氣質によつて、また敦煌石窟が数々の戦乱、冒険の舞台となつた西域の沙漠地帯に存在していた所為もあつて、そこから死を恐れぬ勇敢な生きざまをも想起していたに違いない。

かくて井上靖は、勇敢に生き(個)から(全体)のためへと「学問」に対する視野を広げていく人物として、主人公趙行徳を造形した。作家の学問観、人生観を表現

し、井上靖文学を理解する上でも貴重な一作として、「敦煌」は成立しているのである。

注

(1) 亀井勝一郎「壮大な叙事詩」(昭和三十四年十一月二十三日『週刊読書人』)、山本健吉「敦煌」と『楼蘭』(昭和三十五年一月一日『毎日新聞』)。

(2) 『増補井上靖評伝覚』(平成三年十月、集英社)。福田宏年は以下のようにも書いている。「由来、日本の文士は、学者や学問に対して謂われのない敵意や軽視の念を抱く者が多く、それがまたある意味では文士の反権威主義とも結びついているのだが、井上には、学問の尊厳に対する畏敬の念と、その正確さに対する信頼の念がある。それが、『天平の薨』『楼蘭』などの、学問的、文化史的な小説を産み出させたとと言える」。

(3) 井上靖はエッセイ「桑原隲藏先生と私」(昭和四十三年十月、岩波書店『桑原隲藏全集』月報5)

に次のように書いている。「私は先生の論文の中で(中略)『支那人の食人肉風習』という論文に小説家的な食指を動かし、それを小説の書き出しの部分に使わせていただく結果になった。その小説には長安の郊外の市場で、裸身の女を売っているところがあるが、桑原先生が知つたらさぞ苦笑されることであろうと思う」。桑原隲藏には確かに同名の論文(大正八年六月『太陽』初出、『東洋史説苑』(昭和二年六月、弘文堂)収録)があり、そこには「その当時の支那人は人肉を食用し、その市場に於て公然人肉を販売し」と解説されている。ただし桑原隲藏には、より詳細な論文「支那人間に於ける食人肉の風習」(大正十三年七月『東洋学報』初出、『東洋文明史論叢』(昭和九年九月、弘文堂)収録)があり、井上靖はそちらも参照していた可能性がある。

(4) 「異域の人」本文にもあるように、「傅介子は元帝の時に西域に使い、樓蘭王を刺殺し、義陽侯に封ぜられた人であり、張騫は武帝の時の西域の開拓者で、博望侯に封ぜられた人物である」。

(5) 千仏洞に経巻類を埋蔵することを決意した当日、趙行徳は日没後にそれを実行するまでの時間を使って、「回鶻の王族の娘の霊を供養するため」に「般若心経」の「写経」を行う。その写経の末尾に趙行徳が書き入れた文章の頭には「維時景祐二年乙亥十二月十三日」とある。

(6) 「敦煌」第一章において、「趙行徳が進士の試験を受けるために、郷里湖南の田舎から都開封へ上つて来たのは、仁宗の天聖四年（西紀一〇二六年）の春のこと」とあり、行徳が「睡りこけて」「大事な試験を自ら放棄し」たのは「初夏」のこととされている。「市場で西夏の女に会つたのは、その試験と同日で、それから「十五日程経つた時」に趙行徳は「西夏への旅立ちを決心した」。

(7) 井上靖は「私の『敦煌』資料」（昭和三十五年四月『図書』）で、「当時進士試験の落第秀才に西夏が眼をつけて、彼等を政治顧問のような役にしていたことは事実の記録があり、それについては宮崎市定氏『科挙』も、荒木敏一氏の東洋史論叢の殿試に関する二

つの論文もそれに触れている」と書いている。「宮崎市定氏『科挙』」は、昭和二十一年十月、秋田屋より刊行された単行本と見て間違いない。その第三章には、「仁宗の治世、西夏の李元昊は斯る不平の読書人を誘つて謀師とした。張元昊なる者があつて、累りに科挙に落第し、縦横の才を自負して辺に走り」「遂に西夏に投じ、李元昊の帷幄に参して宋を苦めた」と記されている。一方「荒木敏一氏」の論文については、やや井上靖の記憶違いがありそうで、「東洋史論叢」所載ではなく、正しくは昭和二十八年八月『京都学芸大学・学報A（文科）』に掲載された「殿試に於ける黜落制の撤廃に就て」かと思われる。宮崎市定『科挙』と同様の事件がより詳しく解説されている。なお井上靖は「二つの論文」と記しているが、荒木敏一による別の論文をもう一本参照していたかどうか不明である。

(8) 井上卓也『グッドバイ、マイ・ゴッドファーザー——父・井上靖へのレクイエム』（平成三年六月、文芸春秋社）

(9) 「私の読書遍歴」(昭和二十九年九月十三日『日本読書新聞』)、「西域のイメージ」(昭和三十六年二月、平凡社『世界教養全集』月報5)、「砂丘と私」

〔『砂丘の幻想』昭和四十五年十一月、淡交社〕、「私の西域紀行」(昭和五十三年一月〜五十四年六月、五十五年一月〜五十六年十二月『文芸春秋』)、「講演最近の西域の旅から」(樋口隆康編『続シルクロードと仏教文化』昭和五十五年四月、東洋哲学研究所)のエッセイ・講演録を参照。例えば「西域のイメージ」では、「私は学生時代から西域関係のものを読むのが好きで、西域への入口である敦煌附近の幾つかの都邑については、いつからともなく、それぞれのイメージを持つようになっていた」と書いている。また「私の西域紀行」では以下のように記している。「西域というところに初めて関心を持ったのは京都大学の学生の頃である。専攻は美学だったが、学校には出ないで、下宿でごろごろしながら、西域関係の書物を読み漁った。(中略)戦後、小説を書くようになってから、学生時代に西域の洗礼を受けたお蔭で、西

域史に取材し、西域を舞台にした幾つかの小説を書いている」。

(10) 日記形式のエッセイ「作家のノート」(昭和三十三年九月〜三十四年九月『新潮』)および「私の敦煌資料」参照。

(11) 「作家のノート」。引用部分は「十二月三十一日」の日記として記されている。

(12) 井上靖は「作家のノート」第二回において、昭和三十三年八月十日の日記として、次のようにも書いていた。「敦煌の石窟の内部にもう一つの秘密の穴蔵を掘り、その中に一千年前の昔からの寺宝を、侵入する異民族の劫掠から防ぐために塗りこめたということは、それを思う度に私にはかなり強い感動が呼び起される」。

*井上靖の作品引用は、新潮社『井上靖全集』全二十八巻別巻一(平成七年四月〜十二年四月)に拠った。引用文中、旧字体は新字体に改めた。